

て未信徒と接触し、機会を捉えて福音を説くことにあるが、当時の中国の医療事情が余りにも貧困であったが故に、宣教師は人類愛の立場から医療活動そのものに忙殺されがちであった。

このような状況であってみれば、近代医学の恩恵をより広い地域に及ぼし、それによって医療伝道の漸進的な発展をはかっていくためには、地域的な病院の開設だけでは十分でないことは当然であった。ここにおいて考えられたのは、中国人に対する医学教育を拡充することであり、その一環として中国語で医学書を刊行することも考慮されるに至った。

アヘン戦争直前に入華したホブソン B. Hobson (中国名、合信) は、初めマカオや香港で活動したが、1848年より広州に遷り、すぐれた設備をもつ恵愛医館を開設して医療活動にあたる一方、1850年より58年にかけて非常な努力の末に、『全体新論』『西医略論』『婦嬰新説』『内科新説』の四著を刊行した。これらの中国語医学書の中、『全体新論』は基礎医学論、『西医略論』は治療医学、『婦嬰新説』は婦人科・小児科、『内科新説』は病証論、薬剤論ともいうべき内容となっている。ホブソンは医療宣教師としての立場においてこれらの中国語医学書を執筆しており、随処にキリスト教入信への勧めを挿入し、医学教育を通してキリスト教を伝道することについても配慮している。

特に注目すべきは『全体新論』の末尾の2章にあたる「造化論」「靈魂妙用論」であり、ここでは人身の精妙な構造を通して、創造神(上帝)の大能を称讃し、入信への勧めをおこなっている。

1850年代に中国で刊行されたホブソンの中国語医学書は、やがてわが国にも舶載され、翻刻もしくは和訳が行なわれて、幕末明治初年における黎明期日本の医学界に大きな影響を与えることとなった。この背景には、中国が日本と同系統の文字を使用し、日本の知識人が漢文を読み慣れていたこと、中国と同じくわが国においても漢方医学が主流であり、その他は民間にいわゆる和方医学が普及している程度であって、てごろな西洋医学入門書が簡単には入手できなかった事情が考えられる。

この為ホブソンの医学書は、幕末期のわが国に大きな影響をおよぼすこととなったが、キリスト教書的色彩を内包する中国語医学書の普及は、仏教界にとっては簡単には看過することのできない重大な問題であった。幕末期の仏僧が『全体新論』の持つ布教書的性格を明示し、はげしい論評をおこなったのはこの為である。これらのいわゆる破邪書の中、最も代表的なものは靈遊の著作

『閑邪存誠』であり、この書物は幕末期における仏教とキリスト教との思想的対決についてもその一面を示している。

◆10月26日

女流歌人相模をめぐって

犬 養 廉
(国文科教授)

11世紀の女流歌人相模は、17、8歳で橘則長(母清少納言)と結婚して、やがて離別、長和二、三年ごろ大江公資と結婚、治安元年、その相模任国に従って下向、万寿二年五月に上京した。上京直後、藤原公任の息定頼との恋愛が表面化、公資と離別するが、その後、定頼の足も遠のき、彼女自身は修子内親王家に出仕、爾後、各種歌合に活躍、歌匠としてその生涯を終えた。今回はその東国時代に焦点を当てて、考察を試みたものである。

相模の家集として現存するものは流布本相模集(浅野家本)・異本相模集・思女集・針切相模集の四種である。このうち自撰本として最も歌数の多いのは流布本であるが、同書の五九七首中には、走湯百首と呼ばれる三種の百首歌が収められている。しかもこの百首は四季のそれぞれを初・中・季の三部に分け、続く部類は、さいはひ・命を申す・子を願ふ・うれへをのぶ・思ひ・心のうちをあらはす・ゆめ・雑となっており、二十部各五首というかなり特異な構成を持ち、成立事情もまた特異なものである。この三種の百首歌を便宜上、(A)百首・(B)百首・(C)百首と呼ぶ。(A)は、万寿元年、在国三年の正月、彼女が伊豆走湯権現に参詣した折、ひそかに衷情を訴えて権現の社頭に埋めたもの。(B)は同年四月、権現の返歌として、山の僧より彼女のもとに寄せられたもの。(C)は同年末或は翌年早々、権現に対して更に彼女が贈った百首である。(A)は彼女のもとにメモ程度の資料しか無かったらしく、著しく排列の順序が乱れている。この(A)の順序を正しく復原すると、(A)・(B)・(C)の各百首は順次、(A)⇔(B)⇔(C)と正確に対応、当時における相模の衷情が浮び上ってくる。

結果のみを要約すると(以下引用の数字は流布本相模集の歌番号)、①相模と公資との結婚は、従来いわれる如く、相模の母系慶滋氏と大江氏との家同士で整えられた縁組みではなく、宮廷社交界における、公資の側から

する一方的な強引な結婚と思われること（244・343・447）、②相模と定頼の恋愛は、上京直後万寿二年九月に始まるものであるが、その消息往来は相模下向以前に始まること（83・84・85）。さればこそ「心にもあらで」

（A）百首序）相模に下向、公資との不如意な愛情関係の中で、定頼への思慕が増幅されたこと（306・408・510・308・410・512・314・416・518）、③任国における公資は、治安三年夏ごろより在地の女性とねんごろになったらしいこと（230・329・433・264・363・467）。などの事情が推定される。

最後に、（B）百首権現詠の作者については、a山の僧乃至神官その他、b相模自身、c夫公資などが考えられるが、些細に（B）百首を検討すると、（C）夫公資が最も相応しいが、更に考えたい。

◆11月30日

ホイットマンの「大道の歌」私考

鈴木 保 昭
（英米文学科教授）

19世紀アメリカの代表的詩人の一人、ホイットマン（Walt Whitman, 1819～1892）の詩集『草の葉』（*Leaves of Grass*）は、限りない人間愛と「自然」とを歌った作品として知られている。この詩集の中から、日本人にも親しまれている代表作の一つ、「大道の歌」（*Song of the Open Road*）について、私見を述べたいと思う。

1856年『草の葉』第2版にはじめて収められた「大道の歌」の作品の推移を検討し、1892年第9版（決定版）の表現に固定するまでの詩人の創作過程についてまず考えてみたい。

ところで、この詩が、私たち読者の心に最も強く訴えるところは、第1連の冒頭のところである。

足にまかせ、心爽やかに私は大道を濶歩する
健全に、自由に、世界を眼の前に据えて、
私の眼の前に拡がる褐色の道は、私の選ぶところ
どこへでも導いてくれる。

これから私は幸運を求めない、私自身幸運なのだから、

.....

まことに力強い生命讃歌である。しかも、第2連で詩人が歌っているように、大道は誰もが歩けるのである。病人も、乞食も、泥酔者も、そのほか、どんな人でも、この世の大道を歩くことができるのである。ここでは、いわゆる「肯定の詩人」、あるいは、オプティミストと一般にいわれている詩人の面が躍如としているところである。

ところが、ホイットマンは、この詩の第10連の後半のところで、上の表現をくつがえす歌声を響かせるのである。

私と一緒に旅するものは、最上の血液と、筋骨隆
隆たる体格と、忍耐とが必要だ。

男でも、女でも、勇気と健康とを持たないものは、
この試練の大道に来ることはできない。

もし君が、最上のものをすでに浪費しているな
らば、この大道に来てはいけない。

この表現の変化、転回について、私は次のように解釈したいと思う。

.....「自然」の神は、すべての人間に、公平に、生きてゆく大道を与えた。誰もが、その大道を歩くことができる。だが、その大道の果て——（死後の世界）に達したとき、一体、人はどこへゆくのであろうか。ホイットマンは人間の「永遠不滅の魂」が、天上世界へと通じる聖なる「大道」を人に開かれている‘The Open Road’と表わしているのではなからうか。「自然」の神に抱かれて、天上界（地下の世界ではなく）に昇るには、現世で、数多くの試練に耐えてゆかなければならない。名誉、地位、財産等は勿論、いわゆる、煩惱、五欲を切り捨てて、ただひたすら、感謝と奉仕の心をもって、「純粹」に生きてゆかなければならない。自分の生命、個性を尊重することはもちろん、他人に対しても、限りない「愛」を注いで生きてゆかなければならない。.....

「大道の歌」は、15連、224行から成る長い作品である。この長詩の序詩の部分、展開部、結びの表現について、他の英米詩人、作家の作品と、また、モーツァルトの『魔笛』の一部の表現にも触れながら、考察したいと思う。